

第 21 話 武家政治の始

奥州の藤原氏も亡びて、日本六十余州はことごとく頼朝の威勢に靡き従うようになる。
 彼は征夷大將軍に任ぜられると、幕府を鎌倉に開いて、天下の政治を執った。
 所謂武家政治の始めで、朝廷のご威光はこれより次第に衰える。

頼朝の奥州出征

頼朝は既に義経の首を得て一先づ安心したというものの、奥羽地方をも平定して全国を一統しようとしてから考えていたので、泰衡が義経をかくまった上に、これを殺すのが遅かったのは赦すことの出来ない罪であるとして、これを理由として、文治 5 年 7 月、泰衡が義経を討った時から 3 ヶ月目に、数万の大軍を 3 手に分け、1 軍は下総、常陸の兵を率いて東の海道から進ませ、1 軍は上野の兵を率いて越後から出羽へ向わせ、自分は本軍を率いて中央の奥州街道を進んだ。

奥州の藤原氏亡ぶ

泰衡は驚いて、急にそれぞれ防御の陣を張ったが、合戦に慣れた源氏の将士に敵うはずはなかった。忽ち 3 方から攻め寄せられると、平泉の邸をも焼いて逃げ出し、今の北海道へ渡るつもりで羽後の二井田の柵（現 秋田市）まで行って、そこを守らせておいた家来の河田次郎の家に足を留めた。すると頼朝がその跡を追って、今の盛岡市附近の厨川まで進んで来たので、泰衡は逆も逃げられそうにもなくなり、頼朝に書面を送って降参を願ったが、頼朝はこれを許そうとしなかった。

河田はこれを見ると、不意に主人の泰衡を襲ってこれを殺し、大いに恩賞に預かるつもりで、その首を携えて頼朝のところにやって来た。所が、頼朝はその首を受け取った後に、主人を殺した河田の不忠を責めてその場で彼を死刑に処した。実に文治 5 年 9 月の事で、清衡以来、100 余年の間、奥羽地方に威勢を振舞って栄華を尽していた奥州の藤原氏も、ここに脆くも亡びたのであります。

頼朝は家来を留めて奥羽地方を治めることにし、自分は 10 月の末に鎌倉に凱旋した。

これより先きに、奥羽以外の地は既に悉く頼朝の威勢に服していたので、ここに日本全国は全く統一されて、全国の武士はすべて頼朝の命令に従うようになった。即ち、彼は事実の上で武士の長となったのです。

頼朝、征夷大將軍となる

で、其の 3 年、即ち後鳥羽天皇の建久 3 年 7 月に、— 其の年の 3 月、後白河法皇は 66 才でお崩れになり、天皇が親ら政治をなされていた— 頼朝は征夷大將軍に任ぜられて、名義の上でも全国の武士の長となりました。



源頼朝

第21話 武家政治の始

実に1192年の事で(訳注：守護・地頭を置いて、いちいち国を治める頼朝)、平家が亡びてから7年の後です。一体この征夷というのは、もとは「蝦夷を征伐する大將軍」の意味であり、桓武天皇の御代に**大伴弟麻呂**が始めて任ぜられて、次いで**坂上田村麻呂**が任ぜられた役ですが、**源義仲**が任ぜられた時から、その意味が変わって、武士の**長**となって天下に号令する者の**称**となりました。しかし**義仲**は直ぐに亡びてしまったので、何事も為し得なかったが、今度、**頼朝**がこれに任ぜられると、彼は**鎌倉**に幕府を開いて天下の政治を行うことにした。

幕府を開く

この幕府というのは、もとは將軍が征伐に出かけた時に、必要に応じてどこにでも幕を張って本陣を作り、將軍はその中に在って指図をした為起こった名でしたが、**頼朝**の時から**征夷大將軍**が政治を行う役所を指して言うようになった。実に、これがわが国の**武家政治**の始めであり、**鎌倉**に幕府を置いたので、それが続いた140余年の間を世に**鎌倉時代**といっています。

鎌倉幕府の組織、侍所と公文所と門注所

序に、**鎌倉**の幕府の組織を少し述べてみると、**頼朝**は政治の中心として3つの役所を置いた。

第1の**侍所**は主として武士の進退を**掌**り、兼て、**軍事**と**警察**の事務をも管理する所で、**和田義盛**をその別当 - **長官** - とした。

第2の**公文所**は、(後に**政所**と改称した)幕府の發布する一切の公文を**掌**る所で、朝廷でいえば**太政官庁**に相当する。即ち、一切の**行政上**の事務を統べる所で、**大江広元**をその別当 -- **長官** -- とした。

第3の**門注所**は今日の**裁判所**に当たる。**三善康信**をその**執事** - **長官** - として一切の**訴訟事務**を**掌**らせた。尤も、これらの役所は、**頼朝**が兵を挙げた時から勢力を得るにつれて次第に置いたもので、彼が將軍となって幕府を開いた時には、既に全く出来ていたのです。

守護と地頭と奥州奉行

また、諸国に**守護**と**地頭**とを置いて、地方の**実権**をその手に収めたことは前に述べたが、その後、奥州の**藤原氏**を滅ぼすと、そこには特に**奥州奉行**を置いてこれを治めさせた。而も、これらの役人には、すべて自分の部下の者を以って任じたので、**頼朝**の命令は完全に全国に行き渡り、ここに朝廷以外にもうひとつの政治の中心が出来ることになったのです。

我が国体と武家政治

一体わが国の政治は、天皇がご自身でなさるのが**当然**の決まりでしたので、朝廷以外に幕府の政治があるということは、いうまでもなく大きな変態ですが、**当時の事情**で、これもまた止むを得なかったのです。前にも述べたように、嘗て**藤原氏**が勢力を得た時に、しきりに**幼少**の天皇を立ててわが**俣**を働いた為、天下の政治が乱れ、地方に武士が起こって、ついにその中から出た**平清盛**が**藤原氏**に代わって

第21話 武家政治の始

政治を執るようになったのですが、清盛もまた勢力が盛んになるにつれて、人を人とも思わないような我がままな政治を行った為に、世人の憎みを受けて、ついに平家は源氏に滅ぼされた。

若し武士がうしろに強い武力を持って政治を執るのを武家政治というとなれば、この清盛こそがそれを行った最初の人なのだが、彼は藤原氏と同じく、都に在って朝廷の政治をほしいままに執り行っただけですので、その点で、別に幕府をひらいた頼朝とは全く違うのです。

頼朝の用心

頼朝は、平家に代わって政治を執るようになると、藤原氏や平家が華やかな京都に在ったために、勢力を得るにつれて心が驕って、漫りに高い官位を望んだりして、あるいは衰え、あるいは亡びたのを見て、自分はその轍を履まないようにと、その用心からも、遠く京都を離れた鎌倉に幕府を開いて、朝廷とは全く別に離れて立ったのです。

これが我が国体からいって、変態な事は前にもいった通りです。しかし、頼朝が天下を平定する以前には、地方の政治が全く乱れて、朝廷の命令も一般には行き届かないような不取締りな有様でしたので、たとえ変態にもせよ、幕府の命令が一般に行き届いて、民が安心してその職に就くことが出来るようになったのは、頼朝の手柄であるといわなければならない。

頼朝の皇室尊崇

それに、頼朝は天下の政治を執り行っただけとはいっても、皇室に対しては常に深く恭敬をつくして、決して臣下の本分を忘れることはしなかった。嘗てある僧侶の手紙に、頼朝を尊んで「君」と書いてあるのを見て、頼朝は、「君と申せば天皇の事である。いかに頼朝を尊敬するためとはいえ、こういう畏れ多いことをしてはならない」といって深く戒めて、それ以後は、「君」の字は使わせないようにしたという話なども伝えられている。

武士道の奨励

頼朝はまた平家一門が奢りに耽って柔弱になったのに鑑みて、力の本である武士の養成に心を注いで、その守るべき道を失わないようにと厳しく戒めた。即ち、彼のいう所によれば、武士は戦争をするだけが能ではない、よろしく立派な正しい心を養って民の手本とならなければならない。それには常に武芸に励み、卑怯未練な行いを慎み、名誉の為には命も惜しまないように心がけると共に、常に質素儉約を旨として、大事の時の用意をしなければならぬと、所謂武士道を盛んに奨励した。

彼が奢りを戒めた話としては、ある年の冬の寒い日に、家来の藤原俊兼という者が、10余枚の着物を着飾って頼朝の前に出ると、頼朝は俊兼に刀を出して、その刀で俊兼の着物の裾を切ってその贅沢を戒めたので、側にいた人々まで、うっかり贅沢な真似は出来ないといっ、戒め合ったという事が伝えられている。

武張った遊戯

第21話 武家政治の始

こうして鎌倉武士は、衣食住共にこれを質素にして、一心に行いを慎み、武芸を練るようになった。その遊戯なども、馬を走らせながら的を射る流鏑馬とか、柵の中に犬を放ってこれを追いかけるから射て倒す -- 殺すのではなく、墓目という尖きの丸くなった矢で傷のつかないように射て倒す -- 犬追物とか、あるいは相撲とか、狩とかいうような、専ら勇壮なものを選ぶようになって来た。頼朝が将軍になった翌年の如きは自ら多くの将士を率いて、武蔵の入間野や下野の那須野に狩に出かけ、又、富士の裾野で大仕掛けの巻狩を催したりした。かの音楽や花見や船遊びなどに悠々と日を暮らしていた藤原氏や平家の人達と比べて、何という相違であろう。

これが為めに武士の気風が一般によくなくて、世に鎌倉武士の名が持囃されるようになると、民も次第にこれを見習って身を修めて国のために尽すようになったのは良いが、後には武家政治の当然の決まりであるかのように思う者が世間に多くなって、朝廷のご威光は衰えた。この変態の政治が明治維新の時まで、源氏、北條氏、足利氏、徳川氏と凡そ680年も続く事になりました。

(第21話 武家政治の始め 終わり。 次は前頁に戻り、第22話 源氏の滅亡 へ)